

2023年3月19日 主日礼拝

説教題「だから、わたしも働く」

ヨハネ福音書 5 章 9b～18 節、イザヤ書 58 章 10～14 節

主任牧師 加藤 誠

「わたしの父は今なお働いている。だから、わたしも働くのだ」(ヨハネ5章17節)

主イエスがベトザダの池のほとりで 38 年間、病気のために横たわってきた人に「立ち上がりなさい。床を担いで歩きなさい」と癒されたことが大問題となって炎上したのが今日の箇所です。というのも、主イエスがその人を癒されたのが「安息日」だったからです。安息日は旧約聖書の「十戒」で「安息日を聖なるものとし、一切の仕事をしてはならない」と命じられている大切な礼拝の日でした。この戒めを大切に受けたユダヤの律法学者たちは「十戒で禁じられている仕事」を 39 の行為にまとめました。たとえば「種を蒔く、刈り入れをする、脱穀をする、粉にする、パンを焼く、火をつける」などの行為は仕事にあたるのでダメ。「歩く」ことは礼拝に行くためなら良いが、それ以外の目的は一日約 100 メートルまで。緊急に命に救う医療行為は良いが、それ以外はダメ…というように。旧約聖書には「安息日の掟を破る者は死刑」とも書かれていたため、「安息日厳守」の戒めは私たちが想像する以上に徹底していました。たとえばマカベア戦争で敵が安息日に攻めてきた時、ユダヤの人々は武器を取るより敵に殺されることを選んだそうです。しかしさすがに「これはまずかろう」ということになり、その後、安息日には自分の命を守るための正当防衛は許されると解釈変更されたのだそうです。

そのように「安息日厳守」が徹底していた社会にあって、主イエスに癒してもらった人が、安息日に「床」(たぶんゴザのようなもの)を担いでいるのを見て、「お前は安息日にいったい何をしているのだ！」と人々は厳しく問い詰めます。その人が「わたしを癒してくださった方が『床をかついで歩きなさい』と言われたのです」と答えますと「それは誰だ？」ということになり、その時点ではわからなかったものの、あとでその人が「わたしを癒してくれたのはイエスです」と告げたために、ユダヤ人たちは敵意の矛先を主イエスに向けたのでした。すると主イエスが「わたしの父は今なお働いておられる。だから、わたしも働くのだ」と応えた言葉が問題視され、ユダヤ人たちの殺意がさらに高まったのでした。イエスが安息日の掟を破っただけでなく、神を自分の父と呼んで自分を神と等しい者としたからです。

「安息日」はヘブライ語で「シャバット」(止める)という意味であり、神さまの前に「動くな、静まれ」という日です。私たちは動きすぎている。まず神さまの前に静まることを学ぶ必要がある。なぜか？ 旧約聖書の「十戒」には二つの理由が書かれています。一つは天地創造において神は七日目に休まれたから(出エジプト記 20 章)。もう一つはエジプトで奴隷となっていたユダヤの人たちを救い出して

くださった神の御業を覚えるため（申命記 5 章）。そのように神さまの「創造の御業」と「救いの御業」を想い起して、喜び祝い、礼拝をささげる日、それが安息日なのです。私たちはとにかく働いて、自分で収入を確保することを優先します。そうしないと現実に生きていけない私たちがいるからです。けれども、その現実にあつて、創造主なる神さまの養いを信頼して手を休めることを学ぶ日。そして私たちには不可能と思われる救いを神さまは成し遂げてくださることに信頼して、賛美をささげていく日。「これまで」の養いを感謝し、「これから」神さまが起こしてくださる救いに信頼して礼拝をささげる日。それが安息日なのです。

この安息日について、律法学者たちが「いかなる仕事もしてはならない」という禁止条項にのみ心を向けて、次々に「禁止の解釈」を事細かく決めていったのに対し、主イエスは、神さまの養いの恵みに感謝し、神さまの救いに信頼して賛美をささげるといふ安息日本来の姿を大切にされたのでした。イザヤ書は、安息日のあるべき姿を 58 章 10 節以下で伝えています。安息日は歩き回ることや、自分のしたいことをする日ではない。飢えている人に心を配り、苦しめられている人の願いと一緒に祈っていく日。そして神さまを喜びとし、尊び、賛美をささげていく日。そのような安息日を、主イエスも大切にされようとしたのです。

今日の場合で主イエスは「わたしの父は今なお働いている。だから、わたしも働くのだ」と言われています。神さまは天地創造の御業は六日間で完成させて休まれましたが、出エジプトの出来事がそうであったように、神さまは私たちを空しい奴隷の働きから、神さまの愛のもとに連れ戻すために毎日休むことなく働いておられます。だから、わたしもその愛の神さまと一緒に働き続けるのだと主イエスは言われたのでした。ベトザダの池のほとりに 38 年間寝たきりでいた人は、主イエスの「良くなりたいたのか？」という問いに対して「主よ、誰もわたしを水の中に入れてくれる人がいません」と絶望的な言葉を吐くしかない日々を歩んできた人でした。主イエスはこの人を神さまの愛のもとに連れ戻し、この人が自分の足で自らの「床」を担いで、神さまを賛美しながら生きていけるように癒してくださったのです。

現代のユダヤ教の人々の間でも「安息日」を大切に守る伝統は生きているようです。金曜日の日没から安息日が始まると、人々はまずユダヤ教の会堂の礼拝に集います。そのあと家に帰って家族や知人と一緒に夕食を囲む。安息日に食事を作ることは禁じられているので、金曜日の夕方までに作った食事を楽しむのだそうです。「なるほど」と思ったのは、安息日は「スマホ禁止」。そして自分の遊びに時間を使う前に、まず神さまの前に礼拝を整え、家族や友人と食卓を囲み、お互いを覚えあう日としてゆっくり過ごすのが安息日なのだそうです。さて私たちは安息日をどのように過ごすのでしょうか。ぜひ、神さまの恵みと救いの働きを覚えて、わたしの働きを神さまと隣人のためにささげていく日として覚えたいのです。